

## わたしを形作るもの

今朝与えられた聖書箇所の小見出しは「偽善に気をつけさせる」です。これにわたしは「わたしを形作るもの」という説教題をつけました。聖書箇所とこの説教題がどう結びつくのかと、不思議に思う方もおられるかもしれませんが。ただしく御言葉を取り次げるよう、祈りながら御言葉に聴きました。

イエスさまは弟子たちに向かって言われます。

「ファリサイ派のパン種に気をつけなさい」と。これだけでは何のことだか分かりませんね。話には前後の文脈がありまして、今朝の場合ですと、この前のページに「ファリサイ派の人々と律法の専門家とを非難する」という大きな段落があります。そこでイエスさまは彼らを非難された。もともと彼らがイエスさまをことあるごとに試し、論争をふっかけ、この力ある人物が何者であるかを見極めようとして失敗しています。結果的に、さんざんに非難し、中傷し、悪霊の頭だから悪霊を追放できるのだと断言した。このファリサイ派、これは日本語にすると「分離派」みたいな訳語になってしまうのですが、律法に「従える・守っている」（とみずから考えている）自分たちと、律法を守っていない正しくない人たちを排除する。自分たちの清さ、正しさを守るために「裁いて」「分離する」わけです。それでファリサイ派と呼ばれます。さらに律法の解釈に通じた専門家たち、彼らが律法を細かく解釈していろいろな決まりをさらに作り出すのです。たとえば「安息日を覚えて、これを聖別せよ」という十戒の大切な教えがあります。律法学者はこれに基づいて、一日に歩いて良い距離、これ以上歩くとそれは働いた事になってしまうと、安息日に歩いて良い距離を計算したりする。そういうことをマジメにしているわけです。しかしこれが行き過ぎ

ると「仏作って魂入れず」みたいなことになってくるのです。人を活かすはずの律法が人を殺すものにさえなってしまう。そういう神の律法、神の出来事を、人間が思うままに判断し、解釈することで、それは人間の律法、人間の出来事になってしまう。中身が変質をしてゆく。そういう形骸化した専門職のあり方をイエスさまは非難されました。彼らは、上辺は飾るが、肝心の中身は強欲と悪意に満ちている。それで彼らを偽善者だと非難されたのです。今日の箇所はそれを受けて、「ファリサイ派のパン種を警戒しなさい」とまず弟子たちに言われました。この「ファリサイ派のパン種」の箇所、英語の聖書では「Be on your guard against the yeast of the Pharisees」になっています。いや、つまりパン種と訳されているのが「イースト菌」になっているというだけのことなのですが、やはり地中海世界は小麦文化圏ですから、パン食が基本なのですね。ですから、パンを作るためのイースト菌、パン種の譬えは非常に身近で、毎食、口にするものですから、わたしのようにパンを食べるのは一日一回朝食のときだけ、というのとはおそらくわけが違ふ。毎日、毎食、口に入れるものだけにそのパンをふくらませるパン種は重要だし、本当に身近なことだし、この偽善の問題としてイエスさまが注意しなさい、と言われたことの身近さのレベルが皮膚感覚のレベルだということはこの表現から汲み取りたいのです。偽善はいつでもだれでも陥るわたしたちの本質となりかねないものだということです。パン種なしの生活は彼らには考えられない。ごくわずかのパン種によってパン全体が膨らむ。だからこそ、そのごく微量のイースト菌の質に注意しないわけにはいかない。イースト菌抜きは考えられず、だからこそファリサイ派のイースト菌を混入させてはならない、その見極めがこの箇所のポイントです。つまりファリサイ派のパン種の

本質とは何であり、それがわたしとどうつながるかという視点ですね。イエスさまははっきりとファリサイ派のパン種とは偽善であると言われました。これは彼らの言っていることと中身が一致していない。だから、覆われているもので表されないものではなく、隠されているもので知られずにすむものはない、と言われるのです。この偽善という言葉とそれを非難するイエスさまのお言葉は印象に残るものですので偽善＝悪という刷り込みがわたし自身のなかにもあったのですが、ことはそう簡単に割り切れるものでもないと思うようになりました。

1995年の阪神淡路大震災以降、5年とおかずにわたしたちの国はどこかで大きな自然災害に見舞われてきました。そうしたなかでボランティアや様々な援助、募金などが行われてきました。わたし自身も2007年3月に能登半島地震が起きた年の5月に中部教区の本紀になったこともあり、教区の復興事業に関わりましたし、2016年の熊本大分地震のときは教団の再建委員会の委員長をつとめたこともあります。こういう災害とともに日本のボランティアの制度というのもすそ野が広がり、改善されてきたと思います。大きく構えなくても自分の出来ることを出来る範囲でするタイプのボランティアが根付いてきたことは有り難いことだと思います。このかわりで2011年の東日本大震災のときでしたか、支援物資を大量に持って、いち早くボランティアに駆けつけた俳優がいて、炊き出しをしていたときにテレビのリポーターが売名行為ですか、と訊いたんですね。つまり偽善ではないかと。失礼なことを訊くものですが、相手は、はい、売名行為ですよ、あなたもお金を出して売名行為をして有名になったらいい、というような見事な返しをしたらしい。何をもって偽善というかは簡単ではないですね。わたし自身もさまざまな災害復興のプロジェクトに携わるなかで思わさ

れたのは、やればやるほど欠点は出てくるものだということです。また完全もない。一度壊れたものを、失われたものを完全に取り戻すことは出来ないのです。限られたなかであそこにも、ここにもと手を伸ばせばほころびが出てくるのです。それを嫌って波風をたてずに過ごしていれば何も起こらない。しかしそれでいいのか。批判する人はいるし、無責任なことを言う人もいる。またそういう声が目立ちますからね。じゃあ、あなたがやってみたらということにもなる。少なくとも、相手に完全を要求するありかたはキリスト教の流儀ではありません。人が示す善意の行いすべてを完全ではないから偽善だと決めつけてはならないし、本来、わたしたちは他者の偽善を裁くことの出来るような存在ではない。人の思いを見抜くことが出来るのは神お一人だからです。もっといえば偽善は、人間の本質的な一部をなしていると思うからです。この偽善という言葉はきつくて、わたしたちを怯ませますが、批判を恐れて、完璧に出来ないことを理由に着手しないことも問題でしょう。それぞれが、その時々自分の出来る最善を主の前に差し出していくのでよいのです。あまり極端に考えないほうがよい。

さてイエスさまのお言葉に戻って、「ファリサイ派のパン種」と言われた偽善の中身について、それが今日のわたしたちと関わるころは何かをもう少し見ておきましょう。この偽善者というギリシア語は「ヒュポクリテース」という単語なのですが、興味深いことに福音書にしか出てこないのです。書簡には一度も使われていません。使徒たちは偽善に気をつけよというアドバイスはしていないのですね。使われているのはマタイ・マルコ・ルカの3つの福音書だけ。回数を見ると、マタイが10回、マルコは一回、ルカが3回です。最初に書かれたマルコには一回しかない。圧倒的に多いのはユダヤ人向きに書かれたマタイ

福音書なのです。こうしてみると、いかにユダヤ人指導者たちの偽善を福音書記者マタイが問題にしていたかがわかります。人に褒められるために施し、人に聞かせるために祈り、行いは見せかけで内に真の動機を隠している。傲慢で貪欲ですが外側は謙遜を装い、神の道を曲げてしまう。人々を誤った道に導く。主イエスはそういう彼らを偽善者と呼び、「ファリサイ派のパン種に注意なさい」と呼びかけたのです。先ほども言いましたように、行いが見せかけか、どうかの判定は、正直わたしたちの手に余るように思います。かと言って監視を怠っていい理由にはならない。判断のひとつの基準は、相手のためにやっていると見せかけて自分のためにしている行いであるかどうかは、それを指摘されたときの応答に現れるのではないのでしょうか。相手の存在が、自分の何かのための手段ではなく、目的であるような行いでありたいと願いますし、その行いが自分の思い込みや勘違いで「大きなお世話だ」と言われるようなこともあるかもしれない。わたしたちは神ならぬ身、人間なのですから。しかし、そう相手から言われたときに、申し訳ない、あなたの必要としていることを見誤っていたということが出来るのか、それとも自分は正しいことをしているのになんだと開き直るのか、そのあたりにわたしたちが自分の行いが底に別の思いを潜ませているかどうかをチェックする鍵があると思うのです。どうでしょうか。

最後にこの偽善の問題は今日のインターネットが発達した時代ではさらに複雑になっており、ここからは応用問題だと思うので、若い人向けに気づいたことだけあげますが、たとえばネットの匿名性に隠れて物を言うあり方、ツイッターなどを用いて呟く自分のあり方、あるいはキャラを作って生きるという現代的な選択肢のなかにイエスさまが指摘されたような「パン

種」が潜み、自分を膨らませていないかを考えてみることも必要でしょう。また偽善や、ときには偽悪を生きるための手段として選ばざるを得ないような状況もあります。今日のアフガニスタン、香港、独裁的な国、またブラックな会社、閉鎖的なコミュニティ、そうしたなかでは自分を偽ることで力を持っている者から身を守らなければならない状況も存在します。こうした例をあげても人の偽善を裁くことは簡単ではありません。人を批判する前に自分の歩みがどうかを主の前に顧みたいと思います。わたしたちは、隠された思いを明らかにされる方がおられること、隠したと思うこと、奥の間で耳にささやいたことすらも公けにされると教えられた主イエスの言葉から、最後の裁きをなさる方が天におられることを覚えて、祈りつつ、みずからの働きを主にささげる道を歩みたく願います。

お祈りいたします。